

2016年1月30日 「看取りの技法」全国に広める（朝日新聞）

めぐみ在宅クリニック（横浜市）の小澤竹俊医師（53歳）は死が迫り苦しむ人の手を握り、じっと話を聞く。21年間で看取った患者は約2,800人。「看取りのコミュニケーション」を大切にする。患者に語り掛け、話を聞く、そして相手の言葉を繰り返す、次の言葉を待つ。「反復と沈黙」は患者の気持ちを受け止める技法だ。研究会を催し「医師や看護師だけでなく、介護職員にも看取りに関わってもらえる」ことを望んでいる。勤務医で悩んでいた頃、ある高校での講演後、女子生徒の感想文があった。「誰かの支えになろうとしているこの人が、一番支えを必要としていると思いました」涙が出て、そして気づいた「できない自分を認め最後まで関わる。それが本当の強さでは」と。どんな時でも、患者さんから逃げずに一緒にいる。これが看取るということなんです。

<上記の文は、NatlAcadSystMed (<https://sites.google.com/site/natlacadsvstmed/iryuu-juuji-sha/ishi>) 所収>

「看取りの技法」全国に広める（朝日新聞）の全文はこちら⇒<http://www.asahi.com/articles/ASJ1Z2GJ0J1ZUBQU006.html>